猫の小さな奇跡の物語

あおぞら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の小さな奇跡の物語

【Ｎコード】

Ｎ２３４４Ｊ

【作者名】

あおぞら

【あらすじ】

白い猫は冬の日　小さな奇跡を起こす

（前書き）

これは　昔に書いた話が出てきたので載せてみました。
もしかしたら、違う場所に出した事もあった気がするので、知って
る人がいたら恥ずかしいかも
かなり、手直ししてます。

寒い冬の季節
誰が作ったか分からないが、小さな家のダンボールに
一匹の小さな白い猫がいました。
もうすぐ雪でも降るのか、とても空気が冷える季節
猫は、震えながら毎日過ごしていた。
そんなある日、一人の若者が自分の持つお弁当を少し猫に差し出しました。
猫は最初は戸惑ったものの、とても美味しそうに食べると
「ナー」
と、鳴きお礼を言うのでした。
若者は、それが嬉しかったのかどこかに出かける途中、帰る途中はその猫が居る所に立ち寄るのでした。
それは、若者にとって日課になり
猫にとっても若者を待つのも、日課のようなものになっていました。
寒い日には、若者はタオルを引きつめてあげ　風除けを作ってあげました。
猫も心のそこから、大切にしてくれる若者が大好きでした。
一緒にずっと居たいと思う時もありました。だけど、それは叶わない願いでした。
若者は、アパートでペットは禁止
いつも猫にご飯をあげる時は、寂しそうに「すまない」と、謝っていました。
猫は若者の気持ちが分かっていました。
だからいつも
“謝らないで　いつもありがとう”

そう声を掛けていたのです。
だけど…その声は、動物と人間の間では聞こえない声だったのです。
お礼を言いたい　大好きだよって伝えたい
猫はいつもいつも思っていました。

クリスマスが近づくある時
猫に不思議な事が起こりました。

『クリスマスの日　あなたの願い事を1つだけ叶えてあげますよ』

小さな光が猫にそういった。

“本当にくれるの？”

猫は尋ねてかえすと光は、嬉しそうに揺れだしました。

『クリスマスまでに　考えて置いてください』

そういい残し消えてしまいました。
猫はとても嬉しくなりました。もう　願い事が決まっていたからです。

“ワタシは　人になりたい”

その日猫は　嬉しそうに床につくのでした。

クリスマスの日
猫は、嬉しくてたまりません
やっと、大切にしてくれた人にお礼の言葉が言えるのだから…

でもその日に限り　若者の姿をまったく見る事がありません。
どうしたのだろうと　心配になった猫は初めて自分がいるダンボールから外へ飛び出しました。
外は、寒く白い雪が降っていました

“おそと　真っ白…”

猫はそう思いました。
すると　人がいっぱいいる場所を発見しました。

“なんだろう？”

猫は　興味をもち人々の足の下をスルリと通り抜け見に行きました。
「事故だって」
「車がスピンしたらしくてね…若い子が跳ねられたそうよ」
「…可哀想に、あれはダメだろう」
車の側には　猫の大好きな　ツナが落ちていました

そして車の側に倒れているのは　あの若者だったのです。
猫はビックリしました。
大好きな若者が　倒れている　空から振る雪が若者に沢山かかっていました。
猫は近寄りました　側により鼻でツンツンと触りました。すると
鼻のすみが少し赤く染まったのでした。

“起きて　起きて。　今日は君にお礼が言えるんだよ”

若者はピクリともしません。
すると　誰かが近づいてくる　どうやら救急の人達のようでした。
「なんだ、邪魔なノラ猫だ…菌が付くだろ」

猫は、追い払われその場を離れました。

そして、少し離れた所から見守るのでした。
救急車に運ばれ連れて行かれる若者を見た猫は、追いかけました。

雪の後を追ってたどり着いたのは　大きな建物、病院へ
猫には入る事が出来ません。
さっき話してた声を思い出すと不安になりました。
『あれはダメだろう…』
その意味が何となく猫に分かりました。

自分が何も出来ないと　とても悔やみました。
あんなに優しくしてもらったのに　お礼もいえないと悲しくなりました。

『願い事は　なんですか』

気が付くと猫の元に小さな光がやってきた。
猫は願った

“あの人を　ゲンキにして下さい”

光はビックリしました。
その願いは　自分の願いではなかったから
光は質問しました。

『それを叶えると　あなたは彼に会えなくなりますよ?』

すると猫も言いました

“あの人がゲンキになるなら　ワタシはうれしい”

光は　願いを聞き入れると雪が降る空へ高く高く上り　見えなくなりました。

猫は空を眺めながら思った。

“ありがとう”

そのお礼は　誰に対してだったのか　猫の顔はとても安らかでした。

その次の日

猫は眠るように横たわり動かなくなっていました。

「可哀想に…」

気が付いた病院の看護婦が　木の下に猫を埋めてあげました。

若者は　奇跡的に息を吹き返し　春には退院できるようになりました。

若者は思いました「退院したら猫に　大好きなツナを持っていってあげよう」と

退院した日
さっそく猫がいるダンボールへ向かいました。
でも　そこには猫もダンボールもありませんでした。
若者は　拾われたんだろうと思い　猫の幸せを祈りながら家へ帰るのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2344j/

猫の小さな奇跡の物語

2010年10月10日12時38分発行